

花園大学文学部研究紀要 第五三号 二〇二二年三月 抜刷

五味川純平の中国観と『人間の條件』

―第一部・第二部を中心に―

高橋啓太

五味川純平の中国観と『人間の条件』——第一部・第二部を中心に

高橋 啓 太

はじめに

戦後空前のベストセラーと呼ばれた五味川純平の『人間の条件』は、一九五六年七月から一九五八年一月にかけて、三一書房から全六部作として刊行された大長編である。人気に火が付いたのは、完結編の第六部刊行後に発売された『週刊朝日』一九五八年二月一六日号の巻頭で、「隠れたベスト・セラー『人間の条件』」という特集が組まれてからである。同年一二月旬時点までの累計発行部数は二四〇万部（全土六冊累計）となり、⁽¹⁾同年末の『読売新聞』に掲載された「文壇10大ニュース」のひとつとしても取り上げられた。⁽²⁾

ただし、同記事のタイトルにある「文壇」とは、文学に関する出来事といった程度の意味であり、文壇関係者が選んだ「10大ニュース」ではない。実際、『人間の条件』は文壇からはほとんど評価されず、本人もそのことを自覚していた。⁽³⁾

ういった当時の文壇による黙殺だけが要因ではないだろうが、⁽⁴⁾『人間の条件』に関する研究の蓄積は乏しい。近年、植民地や引揚げに関する文脈の中で再評価が行われつつあるものの、物語を細部まで読み込んだ分析はほとんど為されていない。⁽⁵⁾

本稿では、五味川の中国観が『人間の条件』にどのように描かれているかという視点からの読解を試みる。同様の視点からの考察がこれまでもなかつたわけではないが、正義感の強い主人公の梶が理不尽な振る舞いを見せる人物に立ち向かうという構図や、妻・美千子との純愛という類型的な物語のあり方が注目されることが多く、梶の人物造形を批評する余地はまだ残っている。

一、先行研究

『人間の條件』の先行研究は大きく分けると、一九五八年のベストセラー化の後に発表された同時代評と、二〇〇〇年代以降に再評価を試みた論考に分類される。

同時代評としては、先述の『週刊朝日』の特集の中で、白井吉見は「筆舌を絶する危険と困難のなかで、つねに人間として生きつづけることを念願し、行動する人物」である主人公の梶を「敗戦前夜の満州という歴史的な舞台に登場させることによって、作者は、日本民族にとって、のつびきならぬ積極的な主題を存分に展開することに成功した」と述べている⁽⁶⁾。長谷川泉も「戦争にインテリゲンチアがどのように対処するか、戦場において人間を見失わないということは一体いかなることか、それを実践するためにはどのような苦難があり、それを切り抜けてゆくことがどのような姿をとり、そしてどんな結末になるか、ということを本格的なロマンに構成したものである」とあり、「この長篇のなかのどこかに、今まで読んださまざまな戦争文学のフラグメントを拾い出すことができる」という意味で、「戦後に書かれた多くの戦争文学の集大成」であると評している⁽⁷⁾。

しかし、このような肯定的な評価は例外的である。村上兵

衛は『人間の条件』は、作者の善良な意図に背くことなく、いわばその意図と釣合うことによつてすぐれた啓蒙書とはなつたが、文学作品に昇華することはなかつた」と述べている⁽⁸⁾。また、堀秀彦は、『人間の条件』が「暴虐な権力と組織に対する怒りと個人的な抵抗、それにもかかわらず結局は無力な自分、その自分に対する歯ぎしり——こういった人間感情を軍隊と戦場という場面におり込んだ大衆小説なのだ。ここで大衆小説だという意味は、その主人公が観念的に描かれているということだ⁽⁹⁾」と批判している。

『人間の条件』を「文学」に満たないもの、「文学」とは異なるものとして読んだ同時代評はほかにもある。中村英雄は「おそらく作者の関心のもちかたが倫理的なために（それも結局は個人の倫理に終始した）、結果としては戦争はもっぱら個人の倫理の視点からとらえられて」おり、「この作品の感動はその意味ではほんとうに文学的とはいえないと指摘⁽¹⁰⁾し、高杉一郎は「この小説がほとんどすべての若い読者のあいだで、一種の人生案内として読まれているという事実」を指摘したうえで、「この小説は日本の文学的伝統につながるところはすくなく、かつ弱いかもしれぬが、同時代人の道德的な問題に答えるという文学の課題は——それがどの程度に

形象化されているかは別にして——どの作品よりもよくはたしているわけである」と評価している。¹¹⁾高杉は『人間の條件』を否定的に評価しているわけではないが、既存の「文学」とは異なるとみなしている点では、他の同時代評の著者たちと変わらない。

以上のように、『人間の條件』は「文学作品」とは異なる、読者の倫理や道徳に訴えるテキストとみなされていた。物語の舞台である満洲の描かれ方や日本人の戦争責任についての言及がほとんどなかったことも、同時代評の傾向である。

『人間の條件』がベストセラーとなって二〇年が過ぎた一九七九年、塩見鮮一郎は「他民族の犠牲の上に築かれた梶と美千子の愛の生活など崩壊するのがあたりまえのことなのだ。そこに絶対的な価値をおいて疑わなかった梶の「思想」にこそ問題があったのである。「中略」そして、読後、梶の「思想」はなんだったのかと問うてみれば、そこにあるのは無限に自己を肯定していく御都合主義的な詭弁でしかない¹²⁾」と批判している。同時代評が梶の言動に読み込んできた倫理性の欺瞞を浮き彫りにした批評であり、研究史的に空白の時期に発表された貴重な論考である。

二〇〇〇年代に入り、満洲における戦争責任や引揚げのコ

ンテキストから再評価を行う論考が複数発表された。成田龍一は、「中国を舞台にした物語のなかで、日本人と中国人という非対称的な関係が戦時／敗戦後に逆転することを軸に民族間のありようを描き出そうとした作品といえよう¹³⁾」と戦中戦後の満洲を舞台にしたことの意義を述べている。しかし、川村湊は「梶は、いわば、強者としての被害者¹⁴⁾だった。しかし、「満洲国」においては、日本人はほとんどが、弱者としての加害者¹⁵⁾として存在していたのである」と、植民地における日本人の「加害者」性の後景化を批判し、五十嵐恵邦も「長編小説『人間の條件』は、中国そしてソ連を巻き込んだコロナアルな視点を持った作品となり得たはずであった。しかし、そのような広大な舞台背景のなかにはじまったこの野心的な物語も、結局、日本人の、日本人による、日本人のための、がまん劇として幕を下ろす¹⁶⁾」と限界を指摘している。

川村や五十嵐の批判的検討は妥当であるが、梶が戦争に翻弄されていくという物語の展開に沿った読解が中心である。五味川が『人間の條件』の中で、満洲における植民地支配の問題をどのように描いているのかを考察するためには、第一部・第二部を取り上げることが必要である。

二、五味川純平の中国観

『人間の條件』は、五味川自身の満洲での経験を基にした物語である。五味川は、一九一六年に満洲で生まれている。東京商科大学（現一橋大学）進学のために東京に移ったが中退し、東京外国語学校（現東京外国語大学）を卒業した。その後、昭和製鋼所への就職で満洲に戻り、同地で応召する。一九四五年八月、ソ連軍との戦闘で部隊が全滅する中を生き残り、後にソ連軍の武装解除を受ける。捕虜收容所に收容されるが脱走し、旧満洲に戻るといふ経験を持っている。

以上の経験が、『人間の條件』全六部で描かれている。第一部・二部は、梶が国策会社（社名は出てこない）の鉱山で中国人労働者の待遇改善に奔走し、その後陸軍に召集されるまでを、第三部・四部は、応召後の内務班での生活を、第五部・六部は、ソ連軍との戦闘とその後の彷徨と捕虜收容所への収監と脱走、そして梶の死までを描いている。五味川は收容所を脱走して生き延びたが、梶は力尽きて死ぬのである。本節では、第一部・第二部の分析に入る前に、五味川の幼少期からの生活と、その中で培われた中国観を確認する。五味川の中国観が、梶の人物造形にも投影されていると考えられるからである。五味川は、いくつかのエッセイやインタ

ビュー・座談会などで自身の生い立ちについて語っているが、本稿では、五味川の家永三郎との対談「近代思想の欠落部分——在「満」日本人の中国観を中心に——」（『思想の科学 第五次』第二二六号、一九七二・一）を取り上げる。

まず、五味川の父は「日露戦争が終わるか終わらない時分に、大連にあがって、いわゆる満洲の草分け組のひとつり」で、「御用商人」であったという。当初は「侵略軍の手先として、かなり羽ぶりがよかったらしい」が、五味川が生まれたのは、「シベリア撤兵以来、何カ所かもっていた支店が、今年一つ、今年一つというように、だんだん没落していくという時期」であった。⁽¹⁶⁾

五味川の一家は、大連近くの柳樹屯という小さな村に住んでいた。「半農半漁で四、五〇戸しかなくて、中国人と混在して」おり、小学校でも「日本語と日本の学科の良くできる子」が同じクラスに三人来ていたといふ⁽¹⁷⁾。また、「小学校三年のときから教えてくれた先生、これが新聞記者あがりの大変りベラルな人」で、「中国人を蔑視する」といふようなことから、「比較的フリーでいられたんです」と語るとともに、「封建的な男」であった父に対する反発を「もう少し敷衍して言えば、中国人に対して威張るような人に対して、こども心に

も嫌悪感と反撥を感じるというような育ち方をしているわけ
です」とも語っている⁽¹⁸⁾。柳樹屯での小学校時代が、五味川の
中国観の根幹にあると考えてよいであろう。

さらに、満洲事変（一九三二）、満洲国建国（一九三三）
後に本土から移住してきた日本人に対しても違和感を覚えて
いる。

大連というのは、いい意味でも、悪い意味でも典型的
な植民地都市なわけです。いい意味というのもおかしい
けれども非常にきれいな街でした。

それが、だんだん汚く、俗化していくわけです。それ
と同時に、大連にいる日本人の気質というのも年々悪く
なる。日本人の中国人蔑視というのは、前からあるんで
すけど、それ以前にいた日本人と比べて、新しくきた人
たちの蔑視観の現われ方というか、生活態度というもの
が、かなり質的に違っていたものがあつたように思える。
年次を重ねるにしたがつて悪くなる⁽¹⁹⁾。

『人間の条件』では、五味川がここで述べているような日
本人の変化が描かれているわけではない。ただ、「日本人の

中国人蔑視」に対する嫌悪感が、梶の人物造形に活かされて
いることは間違いない。そして、梶の「中国人蔑視」に対す
る立ち振る舞いを検討するためには、国策会社で中国人の工
人たちの接する第一部・第二部に注目することが必要なので
ある。

三、梶の思想と労務管理

『人間の条件』第一部は、一九四三年三月から始まる。梶
の職場では、スターリンググラードに侵攻したドイツ軍の降伏、
日本のガダルカナル島からの「転進」を話題にしている。梶
は、日米の鉄鋼の生産量に圧倒的な差があることを説明して、
同僚の大西から「梶さんは日本が負ければいいと思ってい
るんですか!」と詰問される。後の場面では、梶が学生時代に
左翼運動を経験していたことも説明されている。

大西との口論の後、梶は採鉱部長に呼び出され、会社から
一〇〇キロ離れた老虎嶺の鉱山に労務主任として異動するこ
とを提案される。梶は《植民地的労務管理の諸問題》という
「老虎嶺の労務事情」について書いた報告書の中で、「支那人
労働者を出来るだけ搾取して、この巨大企業が成立している」
現実に対して、「人間を、人間として扱う」ことによって生

産力の向上を図るといふ持論を展開していた。この持論は、五味川が語っていた中国人蔑視への違和感を想起させる。採鉱部長は、報告書について「多分に左翼的な匂いがしないでもない」と評するが、「出鉱成績が悪いのは、工人の就労率が低いからだ」とされている。老虎嶺の生産量を上げるために、梶を抜擢するのである。さらに、この提案には「招集免除」の特典が付いていた。

梶は、「招集免除の条件と引換えに老虎嶺の労務管理を引き受けようか」といふ気持の在り方」について、同僚であり学生時代からの友人である影山に相談する。召集令状が届き、翌日に出発する影山は、梶を「センチメンタル・ヒューマニストの見本だぞ、きみは」と揶揄し、さらに、「啓蒙活動とか反戦運動に若々しい情熱を注ぐような」学生であった自分たちが、「特高一課の岡ッ引に挙げられて、ヤキを入れられ」、「学校を出ると、外地の方が入営を免れる率が大きいから、海を渡って来て」国策会社に就職したことを、「反戦思想の青年闘士変じて死の商人の走狗となるの図だ」と自虐的に振り返る。梶がいくら戦争に批判的でも、影山にとっては、自らも含めて「戦争を事実において是認してしまった人間」に過ぎなかった。梶も「俺達は二人とも墮落した」と認めている。

この問題は、梶が老虎嶺で労務管理を担当する中で再び浮上する。梶は鉱山の生産力を高めるために、中国人の工人たちが「工頭」の率いる組に分かれる「工頭制度」といふ身分的な関係を解消して、直轄制度に切り換えること」を提案する。なかなか成果が出ないことに苛立ち、「戦争は時間をくれななんだ」という労務係事務所所長の黒木に対して、梶は「日本人の戦争に、何故支那人労働者が協力しなければならぬかということ」を考えるべきであると説くが、「私は君の怪しげな思想を聞いているんじゃないんだ」と一蹴される。それでも、共に労務管理を担当する沖島と協力し、それまで工人の賃金を「ピンはね」していた「工頭」の日本人社員たちからは強い反発を受けながらも、「工人の就労率は次第に上り、出鉱量も徐々に増えた」。

しかし、憲兵隊からの要請で「北支の捕虜」である「特殊工人」約六〇〇名の労務管理も引き受けることになり、困難に直面する。「特殊工人」は、老虎嶺に着くまで食事も休憩も与えられないまま貨車に押し込まれていた。到着時には十二人がすでに死亡しており、他の「特殊工人」も衰弱し切っていた。梶は「最低限度の人間の条件の範囲内」で対応しようとするが、日本人を信用していない「特殊工人」の逃亡

が相次いでしまう。

このような状況が続き、物語の第二部に入ると、梶と沖島との相違点も前景化していく。沖島は梶の老虎嶺に関する報告書を読んでおり、その考え方に一定の理解を示しているが、その一方で、「俺は君の中に偉大な革命家を期待しているわけじゃねえんだし、戦争というバカでかい機械の廻転をよ、俺という蚕の糞みたいに小さな歯車一つで、逆転させようなんて大それたことも考えちゃいねえんだ」とも語っている。梶の理想はどうあれ、国策会社の社員として事実上戦争に協力している現実を突きつけるのである。

参考までに、内務班での生活が描かれる第三部に登場する、新城一等兵との対話を確認しておく。新城は「実兄が思想犯に問われて刑務所に服役しているという理由だけで烙印を捺されて」おり、自らも満洲国境を越えてソ連に逃亡することを考えている。影山と沖島が現実に対する諦念に陥っているのに対し、新城は理想を追求する人物なのである。新城は、学生時代に左翼運動に関わっていた梶にも逃げる気がないか尋ねる。梶は、「向う側の畑には奇麗な花が咲いているらしいからと云って飛び込んで行くのは、何か根本的におかしいんだ」と誘いを断る。新城が「論理じゃなくて、梶のはモラ

ルだ」と指摘するように、梶は私刑を行う古年次兵や下士官の理不尽さを看過できず、事あるごとに対立していく。影山や沖島との関係では理想主義的に見え、新城との関係では現実主義的に見えるが、自分が置かれている場の変革を目指していくこうとする姿勢は一貫している。

第二部に戻ると、梶は結局、現実を変えることはできない。第二部の後半では、「特殊工人」七人が、以前から梶に反発していた現場監督の岡崎によって脱走を企てたという罪を着せられて捕まり、憲兵隊によって見せしめの斬首刑が行われることになる。梶は斬首刑前夜、危険を冒しても七人を逃そうと考えるが、妻の美千子に止められて断念する。翌日、刑場で三人の処刑が終わった後、梶は「やめて頂くと前に踏み出し、それに呼応するように」「特殊工人の集団が総立ちになって、枯野を押し渡る津浪の前触れのような不気味な喚声を上げはじめた」。これによって処刑は中止されるが、梶は憲兵隊に連行され、「招集免除」の特典を失ってしまう。こうして、梶の老虎嶺での労務管理改善の試みは頓挫するのである。

四、鉄条網の内と外

自分を「戦争というバカでかい機械」の「小さな歯車」に譬える沖島の言動をさらに追っていきたい。沖島は以前から工人の売買を斡旋し、新たに「特殊工人」を別の炭鉱に売って大金を得ようとしていた朝鮮人の張命賛を捕まえ、暴行を加える。梶が感情的になった沖島を問いたですと、「戦争という非人間的な現実人間を対置して、その矛盾の中で人間を主張しながらだよ、しかも反面では戦争に協力するというきわどい芸当は、もうこれ以上出来ない」と告げ、さらに「腹が立てば、工人もぶん殴るさ。沖島という野郎がぶん殴るんだよ、これは。日本人じゃねえんだ。ところが君は、そんなじよそこらの一匹の野郎であるより先きに、日本人なんだな。そこんところが違うんだ」と言う。沖島は「宣撫工作に通訊として使われてい」た時、「チャンコロの抗日分子を叩き殺す手伝い」で「生殺しにして土に埋めて、踏む」行為を「させられた」経験がある。強制的とはいえ、「日本人」としての行いである。国策会社の社員として工人を「ぶん殴る」ことも、「日本人」の暴力ではないなどとは言えない。

梶の「日本人」であることの自覚の意義を考えるために、武田泰淳「審判」〔批評〕一九四七・四）を参照したい。「審

判」の舞台は敗戦直後の上海で、語り手の杉をはじめとする日本人たちは日本の滅亡さえ考えざるを得ない状況下にあった。杉のとある友人は、「一国が亡びることは、それだけのエネルギーの消滅のように見えるが、実は人類全体のエネルギーは不変不滅なのさ。それは物理的に見て、宇宙のエネルギーが不変不滅であるのと、ちょうどおんなじなんだ。だから日本が亡びるということはちつともおどろくにあたらんのさ」と述べ、「日本人を廃業する」ことにも抵抗がない。しかし、復員兵である二郎は「日本人一人々々の場合ですね。自分々々としてはどうなんでしょうか」と疑問を投げかける。実は二郎は、応召中に無抵抗の中国人を射殺しており、その罪の意識に苛まれていた。自分の罪と贖罪として中国に残るという決心を書いた手紙を杉に残し、失踪する。一人の「日本人」として贖罪する二郎は、日本という国家や国籍を顧みない杉や友人に対して批評的な存在として描かれているのである。²⁰⁾

『人間の条件』でも、梶と沖島の違いは「日本人」としての自覚の有無にある。梶は、沖島に「あなたはあんで、言葉の用品を使って、自分自身を万国共通の庶民という概念にすり替えてしまつて、僕とは全然違う立場にいると宣言しに

来たわけだ」と述べている。沖島の「日本人」としての暴力性の無自覚さを指摘していると言えるが、あくまでも自分と沖島との間に立場の相違を見出ししているに過ぎず、沖島に対する批判が深められることはない。

同じ第二部では、梶の方が批評される側に立たされる場面もある。「特殊工人」総代の王享立との対話場面である。第一部・第二部で梶が対立するのは、工人たちを劣悪な環境に置くことに何の疑問も抱かない所長の黒木や「工頭」、「特殊工人」を貨車に詰め込んで連行してきた憲兵隊である。だが、梶の言動の問題を浮き彫りするのは、王である。

梶は「特殊工人」の脱走を防ぐために、王と信頼関係を築こうと何度も話している。王は、第二部冒頭で梶に手記を渡す。その中には、郷里の村にやって来た日本兵が妻を含めた村の住民たちを虐殺し、自らも捕虜となり拷問を受けたことが克明に書かれてあった。テキストの中では、王が中国語で書いた手記を、梶の部下である陳が漢字と片仮名表記で日本語に訳した形で載せられている。この手記自体、植民地における「日本人」の加害行為を詳細に語るテキストとなっていない。手記を読んだ後に王と会った梶は、次のようなことを語る。

「しかし、問題はな、王先生、或る種の日本人はお前達中国人よりも先きに日本人自身によって侵略されていくということだ。つまり、俺達を焼き殺す火がひろがって、お前達の皮膚を焦がしているということだ。お前達は、いま、鉄条網の中に隔離されて、そうしようと思えば、高みの見物をすることも出来なくはない。あいつは日本人だ、あいつは侵略者だと云ってな。或は、修養しなさい。発展させなさい、と云ってだ。火の上にかかられている俺はどうするのだ？」

梶は確かに、社内の人間だけでなく憲兵にも睨まれているが、妻や同胞を日本兵に殺され、「特殊工人」として連行されてきた王に対して、このような被害者意識を表明することは居直りでしかない。実際、王は「誰でも自分を悲劇的に見たがるものだ。観念操作で悲劇美を作って、それに酔いたがる」と批判している。

ただ、この場面での梶の問題は被害者意識だけではなく、鉄条網に関する言及の中にもある。「特殊工人」の宿舍の周囲には鉄条網が張り巡らされており、「特殊工人」たちは隔

離されている。鉄条網は、植民者である「日本人」の権力性と暴力性を可視化していると言える。⁽²¹⁾しかし、梶はそのことにあまりにも無自覚である。「鉄条網の中に隔離されて」いる王が、「高みの見物」で「日本人」を見下ろすことなどできるだろうか。さらに、「誰でも自分を悲劇的に見たがるものだ」と言う王に対して、梶は「俺は、お前が俺の立場に立つたら、どうするかを、鉄条網の内側から見たいと思うよ」と返答する。鉄条網の内側「特殊工人」と外側「日本人」は、

後者が前者を管理する関係性にあるはずだが、梶は内と外を物理的な位置関係として捉え、なおかつ見る側と見られる側が反転可能であるかのような関係性として語っている。王は、梶が「或る種の日本人」として被害者的に振る舞おうとする欺瞞を批評できる存在であるが、当の梶は、対話の可能性を閉ざしていくのである。

おわりに

満洲で生まれ育ち、「日本人の中国人蔑視」を嫌悪していた五味川は、梶を「日本人の戦争に、何故支那人労働者が協力しなければならぬかということ」を考える人物として造形した。しかし、梶は沖島の「日本人」としての暴力性を指

摘することはなく、自らの被害者意識を批判する王に対しては、鉄条網の内と外の間にある非対称性、すなわち植民者と被植民者の関係性を無視して、「或る種の日本人」の立場を強調する。王との対話によって、植民地支配に対する問題意識が掘り下げられることはない。

論点は変わるが、梶と美千子とのやりとりにも、こういった特徴と軌を一にした傾向が見られる。すでに確認したように、採鉱部長から老虎嶺行きを提案された梶は、自分の思想を売って「招集免除」を手に入れることへの後ろめたさを影山に話していた。この後、梶は老虎嶺行きの話を美千子に伝える。その場面では、「招集免除になった、だから君と結婚出来るようになった、だから早速結婚しよう」という考えの浅薄さを自嘲しているのだが、「招集免除」の特典を得ることは前提となっており、自分の思想を売ることの是非を問うことはない。この場面で、梶は「僕が考えの糸を手繰って行く」とね、いつでもその端を君が持っていて、ここまでおいでおいでをしてるんだ」と言っているのだが、美千子の存在が梶の判断や思考を規定していることは間違いない。⁽²²⁾

第二部後半で「特殊工人」の処刑を止め、憲兵隊に連行された梶は、拷問を受けた後、監房で「美千子の幻影を呼び出

して」対話を試みている。その一部を引用する。

「君は、俺のためにひどい目に合うかもしれない。許してくれるだろうか？」／梶は美千子の応答を待った。美千子がこう答えてくれるだろうと思った。／「許してくれるかなんて、どうしてあたしが！ あたし云ったじゃない？ 迷ったっていいのよ、あたし、行きます、一生懸命、あなたに遅れないように。あなたは迷わなかったわ。迷いそうだったけれど、正しい道を選んだわ。だから、あたし、喜んでついて行きます」／美千子はきつとそう云ってくれるだろう。梶は暗い壁に向って、悲しくなった。(傍線引用者)

自己内対話の中で肯定される(自分で自分を肯定する)ことで、梶の矜持は一応保たれたと言えるかもしれないが、そこに他者は不在である。労務管理の仕事で「人間を、人間として扱う」という梶の試みは失敗する一方、刑場で「特殊工人の集団が総立ちになって、枯野を押し渡る津浪の前触れのような不気味な喚声を上げはじめた」ことにより、読者にはカタルシスがもたらされ、第一部・第二部と続いた老虎嶺編

は終わりを迎えるのである。

なお、梶が憲兵隊に連行されている間に、「王亨立以下三十名の特殊工人」は老虎嶺から脱走している。憲兵隊から解放された梶は、所長の黒木からその話を聞いて哄笑する。第三部以降も物語の舞台は満洲だが、物語の最後まで、王のように梶の思想を批評し得る中国人が登場することはない。

注

(1) 『読売新聞』(一九五八・一二・二朝刊、二頁)に掲載の『人間の条件』の広告に、「堂々二四〇万部突破 新記録を樹立」とある。

(2) 「文壇の10大ニュース」(ベストセラーの条件(五味川純平「人間の条件」二百四十万部売れる)、「読売新聞」一九五八・一二・二十九夕刊)四頁。

(3) 五味川純平・佐古純一郎(「対談」『文学の条件』(中公論)一九五八・八)参照。

(4) 『人間の条件』とこの時期の文壇の変質について、本誌前号掲載の拙稿「五味川純平『人間の条件』に関する序論的考察」で論じている。

(5) 李潤澤「研究報告」小林正樹の映画『人間の条件』

- における満洲イメージ——原作小説との比較の視点から」〔『映像学』第一〇三巻、二〇二〇・一〕は、小林正樹監督による映画『人間の條件』（松竹、一九五九～一九六二）の満洲表象を五味川の原作と比較し、細部にまで踏みこんだ分析を展開している。
- (6) 臼井吉見「ついに出了た戦争文学——「人間の条件」を讀んで」〔『週刊朝日』一九五八・二・一六〕八〇九頁。
- (7) 長谷川泉「戦争文学の系譜」〔『近代日本文学——鑑賞と研究——』明治書院、一九五八〕二五三～二五四頁。
- (8) 村上兵衛「人間の条件」論——人生的感動と文学的感動と——」〔『新日本文学』一九五八・六〕一五八頁。
- (9) 堀秀彦「西部劇「人間の条件」」〔『新潮』一九五八・七〕六六頁。
- (10) 中村英雄「『人間の条件』をめぐる」〔『世界文学』第一七号、一九五八・一二〕九～一四頁。
- (11) 高杉一郎「批評とはケチをつけることか」〔『多喜二と百合子』第六卷第一号、一九五八・一〇〕三〇頁。
- (12) 塩見鮮一郎「人間の条件」梶ヒロイズムとその破産」〔『創』一九七九・一〇〕一六八頁。
- (13) 成田龍一「『戦争経験』の戦後史——語られた体験／証言／記憶」〔岩波書店、二〇一〇〕一三三～一三四頁。
- (14) 川村湊「『人間の条件』(1956-1958) 五味川純平 (1916-1995) 語り継がれた植民地と戦争の「記憶」」〔『現代思想』第三三卷第七号、二〇〇五・六〕一九七頁。
- (15) 五十嵐恵邦「五味川純平と『人間の条件』」〔『敗戦と戦後のあいだで 遅れて降りし者たち』(筑摩選書、二〇一二) 七七～七八頁。
- (16) 五味川純平・家永三郎〈対談〉「近代思想の欠落部分——在「満」日本人の中国観を中心に——」〔『思想の科学』第五次』第二二六号、一九七二・一〕一一頁。
- (17) 同上、一三～一四頁。
- (18) 同上、一四頁。
- (19) 同上、一二～一三頁。
- (20) 「審判」については、拙稿「武田泰淳「審判」に見る「文学」の「政治」性——戦後文学再検討の視座」〔『昭和文学研究』第六三集、二〇一一・九〕で論じている。
- (21) 李潤澤は注(5) 前掲論で、映画『人間の条件』についてであるが、「鉄条網は、実は日本帝国主義のメタファなのである」(一四五頁)と述べており、示唆を得た。

(22) 五十嵐恵邦は注(15)前掲論で、梶のこの言葉について「いろいろと理屈をこねてみても詰まる所は、美千子との生活を手に入れるために、老虎嶺という植民地主義的搾取の現場に乗り込んでいくことを選択したのである」(五九頁)と述べている。

付記 『人間の条件』の引用は、『五味川純平著作集』第一卷

〔第三卷(三一書房、一九八四)に拠った。引用に際して旧字は新字に改めたが、『人間の条件』(『人間の条件』)の表記は各文献の表記に従った。本稿は、二〇一九年度花園大学特別研究助成の成果の一部である。